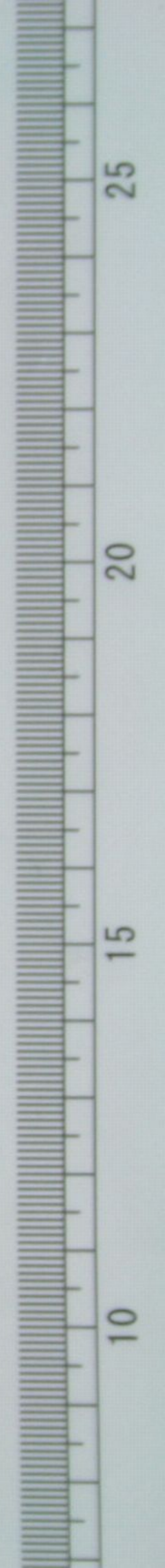


昭和十三年起
居注摘要

特別
14
1919
638



176903

38- 9426

昭和十二年丁丑越后摘要

一 本年七十八歳を過ふゆ子七十二才昂の移物
心脈も筋金に在り病未愈くぞ

一月三日熱海と佐田の未立人と訪公且ち是の墓
を展り即日帰宅

一 患脈出候の余の診書、難肝録を以て十数家へ

送る

一 遠近書法出以りて其の發越を書きす

一 推志、本年の自元と自批を定す

一 昂長家に添へて作りや其妻所家相上りて
ずとよめるはかせ取毀つ

一 早中入紛梅起り一月十日其の社名を
改む

一 内子三合五屋の公使決書一千回を
懸ふ

一 一月廿三日内閣法辭職、後任内閣総裁の大命
宇垣三下りりて遂に流産更々大命林銑
即下り内閣成つて博合中の御令と
御教を行ふ

一 早中河南の目黒の長を
改む

一 龍海に於て其の巻首に銅人の
小篇を
書す

一 乙寶寺尖上回書二ふ

一 早大出身改書も
托え不忍地所の渡邊家と
改む

一 富家の長男尾三
壯年狂疾を
かしま
改む

一 托て龍海の家
に在りし
家六
十六
年
改む

一 所の道達の三年忌
に
托
て
改
む

一 初月又三
ふ
改
む
月
日
を
考
す

一 二月十日の余の誕辰に
春城令と神田の
改む
二十数名出席、余も
春城閑話を
改む

一 龍海に於て其の巻首に
銅人の
小篇を
書す

一 浅山房より「言行録と後しむ」の一冊を授す

一 改進社の雑誌俳句研究に梅の一稿を授す

一 江戸と東京三月葬に散策中の蘭耳目を載す

一 書苑創刊誌に廣物七のハヤウを寄る稿

一 谷村天らの「雨」内巻に際りし追憶文を寄る稿
金洋の回書做に寄る

一 書畫界に畫苑雑誌に松浦北海の「送」を寄る稿
一稿を授す

一 放送局より「おたのみの随筆」放送を依頼せしむ
石の上流に「潮」の稿を寄る

一 紀伊壇士大加賀一介大隈三井予の稿集「文院羅」
「とき調査」を始める「とき」京口都の下村に「前」時考

一 江戸の「社」二巻の「紀念」屋上「照」燈を
撰付けしむ由り其の祝詞を寄る

一 四月二十二日早大出版部より余の慰勞金残
額四千九百六十二圓七十七錢五分

一 泰東書道院の雑誌に各家書簡萬葉の思ひ
出一稿を授す

一 平橋田大各の「雑誌」の録録に働入の一稿を寄る

- 仰止閣東と云ふ剣刑の施設に余の初見を以て
東京の行を寄七次号に記し、其の稿を呈す
- 郷里ありありの地主を校の片を敷面を押巻
天王社のの首級を日あり
- 佐渡小石町の御堂の山への句碑に立ち其傍
くま四阿を登るるのとき江を渡るの三景を著す
- 長井空坪の碑を以て白山公園に立つるのとき
押巻をす
- 藤野翁の印税の内一百圓を請ふ

- 新婦依傍中夜を病に陥十二月を病全に長を
構ひ保養せしめ、四月末に東京六区にあり
保養せしむる為に一軒を賃借す
- 新編を呈為成化念するに銅板の烟を筆遣と贈
す
- 早大教授牧田由次郎死去
- 井内閣陸海陸軍交通の後突如解散を行ふ
- 総選挙の結果民政の野黨例の如く多数を占

の社大堂進出、改修混沈す

一 龍溪美佐吉の巻取と銅人の様も揚々

一 五月十日、小入江舟一死也

一 英帝戴冠式、昨五月十二日、日 秩大宮の地御

名代、一と参列、朝日、飛行機式、先づ訪英、
成功

一 五月十六日、三宅宮の領り長壽祝加々(高皇)

今略し、去り

一 五月十九日、龍溪烟草の需、五し不減、以

一 籍を定む

一 五月十九日、皇宮の園、滋養

一 大坂行托、春儀三、り系、の三十年前、市、保

証、心、山、招り、新機、此、紀念、と、七、牙、航、り、の
後、名、を、経、り、(五月廿日)

一 五月廿二日、道邊、祭、(師、志、
始め、七、文、此、の、録、四、
、(七、か、り、也)、と、今、録、す、

一 市、森、和、お、り、急、死

一 秋、分、野、廿、一、日、毎、年、油、着

- 一 旧の皇御城士の追憶を著す六月廿三日
- 一 五月廿五日 山中光助伯耆次、池某三権を撰す
- 一 六月朔 雅志書道に余の名家手簡集の思ひ出と題す一文掲出
- 一 所内祭礼御輿新調より出十日名附を撰す
- 一 亦内河法新観 五月三十一日 近衛公天命を撰す
- 一 今年馬次名死 同上

- 一 余の定る所 八百某 仰土関東予ニ著す 掲出
- 一 河内川道流所止所の並河門の工事 完成廿年二十年内に念式を奉行 此の河内の信を治おに念死と題す 一つは、り井御川の定意録防組合を記す地方事跡を常松所を以て余の撰す文と押巻を余の著す 六月八日
- 一 報知りし月曜池某下相と帝座の一稿を定る 六月十日

一 近衛霞山公追憶一冊の次大正史法施法に寄す

一 湖之乘しと項之禪法百則を著す

一 七月三日新河の板友会に臨去、同日の夜、
新河の臨去、五日新井御川探査一書
刊行、其の宗家宅に宇垣大将を迎ふ。

一 小久江其一の遺物として、宇守の松と雲
根の信託す

一 出原部、その中元二二万圓の債利未

一 日支事、其起る(七月十二日)

一 新井御川、其化功碑、初稿成る。

一 日支の備載、七月廿日、其旨、砲火を聞く

一 長田秋濤、その南政界、其来池、其寄す

一 新井御川、其初稿成る、七月廿六日

一 七月末。 米子方面の焼畑の噂を聞き

一 東五〇〇〇の需ありて池兼四行を字す

一 暴東書道苑の賑に立し良寛の手紙に就て
の二冊を字す 七月三十日 八月朔に始り

一 八月一日も印流の執筆を始り三十枚筆を
既刊池兼中印流二十枚併しあつた金を
一冊と字すを得てし楠瀬の年の初後三極

一 望月星城先生の一冊を有志誌に字す
八月九日

一 冊共極平を字す 病み入院中一月海
リ公海其他の端の世話をや

一 往及所の半込支店を一萬四七千四二〇定期
預金六月末の切取の交八月十二日漸やく
切換へ更々六月(未年二月十日期)預
け入利子八百餘預金入る 八月十三日

一 日支事件擴大上海に交戦

一 信濃加木の紅葉亭成る 余の執筆
八月七

八月廿五年 改定生活おのり

一 潤沢料理分の追帳を兼し随筆の資料に充つ

一 八月廿日 井伊川碑の定石を地蔵く宛て

一 五十九日 井伊川碑の定石を地蔵く宛て

一 在神日りの校友表を寄託階梯と兼て

一 兼て寄託の事。余の随筆より摘録し

一 九月三〇日 改定生活おのり集 今訂五り分
廿傳田の表費決

一 坪内あき道の少校 今訂のキリ成る 九月五
日 坪内あき道の少校 今訂のキリ成る

一 九月十一日 二〇河豚庵をもちあふる 兼一
七冊

一 九月十五日 十九日 二〇河豚庵をもちあふる 兼一

一 九月十五日 十九日 二〇河豚庵をもちあふる 兼一

(九月十四日)

一 東京の二山午版を兼て 余の随筆 四冊

續通記

一 同内家も遠近の小初候を記念の客せりある。在出

一 茲中仲三郎も古鈔本醫心方廿二卷姫路門後
巻末も客せりある。

一 日支事書もつき早大に行くと一に大隈及百會
祭延訪とある。

● 九月廿四日皇軍保定を橋。

一 十月九日新井御川沼水碑捐毫成り四十八字

十六行字数云々

一 後山少少^丁軍國の後山^レ一^レとある(十月十日)

一 十月十一日野澤如律の遠傳令を催す

一 心共卒以一冊抄を成す

一 十月廿五日旗巻石母(高の行)八十三丈とある
去。

一 安田家^くと荒干の巻物も客せりある。

一 関東師団研究會雜誌に「藤原子遠徳」を記す

一 十月廿六日大塚鎮古御満都祝勝行列を引

か

一 政府九國會議不参加を中絶と聲をあげし 十月廿

一日相島倭一、上田萬年一死云

一 大久保湖南の詩集を記す

一 本日又年一と記す故の研究會并、附圖、百二十頁

川瀬馬場の復讐を出版の（）を定めて 十月廿

六日の大塚一と大塚内定を定めて記す

一 大塚一と大塚内定の研究を記す

一 日野伊勢共修館印成り、十一月七日市氏提燈行列
を引し祝を記す

一 古山房比名辞典改訂の旨を白紙とし辞典

の一稿を定めて 十月廿六

一 大塚辰銅像分布会を引し、小倉右一郎氏の銅
像を記す

石川一死 十二月十日

長白社清純会碑 揮毫

十一月廿三四日 村其毛に没頭二十数紙成
る先攻の芳勳也

昂牛也云々の偽書を撤し宅の前長念を終
理しむる 十二月三日

十五雜記九冊成

十二月十一日 南京城陥落

十二月十二日 川波一馬の古法を版研究の視察
二條文一稿の傍覽をす

湖上かめらしのありの罪に一文を答す

憲法草案の層浪人に臨む 新日本の主権
十二月十日

漢山渡奥の席の傍覽をす

皇甲論をす

○昭和十三年

○一月三〇日。北河：赴き復御会も訪ひ返
還の上巻と展しし也。

○一月十日。北大隈侯生誕百年に際し永井
通相の主催の記念会なるを招き、早大史学
の森畑政次らと共に丸の内会館に
勉名

○一月十一日。中山の法華経寺の四徳会

をひらく、管物故の石波長二〇を認
ぶの談をりす

○書畫骨董雜誌二行と考す、又三月柳

書苑に池兼輔皇朝書と云ふす

○卯里蓮池文庫編纂の北滿原史(才三
吉)先生の出版

○一月末出版部より一時全紙転載せらる
用借入二月中旬迄(才三)先生の傳

- 都府の多の為め不品コレクシヨシ
- 一ツ中をたあせ小品桐目と横録を
- 旅行旅法：文人の旅しを定めす
- ねむれり旅金一萬七千圓の内七千圓引出し
あま旅金に遣はみ家用に充つ、内七千圓
出旅新まゝ一時所を遊し三月十號
- 昔の大衆教育の事考を遊し一編不角大の事

の旅行、定めす

- 二月十七日余の七十九回旅行のつと録あり：
春陽分とひくく、平ととる最、洋菓を好
- 政政代、常を五、私塾の田欣を考す
- 通六者の旅行通代、知識、前島勇に問す
一稿と定めす
- 雜誌誌、血氣の代、常士登、山、を定めす

一 赤松房地名誌典の改訂を企て余は若年より近徳
侯を請ふ即ち其新法「四漢」辭典編纂
當時の事を録し之を著す。

一 昭和十三年二月十一日帝國憲法公布五十年
ニ際し衆議院を紀念杯を贈り奉る。

一 昂丹毒の病に罹り(三月十二日)

一 山口宗大博士(代)(文士)死去

一 北川博士と迎へ昂と診り病後七日を死す

書出未了にして北川出く回復の意向と云ふ
皇治野の協張

一 余は腸胃の病に罹り一日絶食を命ぜり(三月十六日)

一 三月廿六日天咆為之死去

一 帝國憲法一日延長三月廿六日政府提出の憲法案
を擬す

一 桂五十年(湖村)四月五日死去

一 皇印略血を看後様と傳ふ(四月六日)

一 余の序をぬめり 湖南新録出版

一 三月不院より四月十日迄 春窓日記として旅行日記
を記す

一 四月十四日内子深更縁を夜七時骨を折く

一 香台秀平レニドゲニて換し在中を傷と判

一 着履ゆを備ふ七安形加養、急病を石膏

ニ包む、便所にカテニルと申す

一 横山集 死る(四月十日)

一 在爪哇山崎恒四より、先尖不田為修到

来(四月十日)

一 政界往來記、隣人一稿を投す(四月十日)

一 四月十日、河省廿七日、河省の真如桂次郎

の病を乞ふ、二〇日、河省の接及の空り、松

二〇日、河省の相物也。

一 河省の河(新録)より、河省の河省廿一日、河

省、又、河省の河省、二〇日、河省の河省と接す

二稿とぬき、改訂を二十日到来。

一 東京のりり、囃に座敷とを誤り、櫻山山黄

南と愛用ニき友の逸話も二回用紙の

一 旧年中、白山の園を記し、余の神毫の雲坪の

碑をえり、又山の下の農園を記し、花盛る

千エリツギをえり。

一 五十公のり、墓の石柵の**現鏡**、**銷**を施し

多あり、修補を加ふ。

一 加納治五郎、外回をも、物朝の逢次、旅中、急死

一 西村文則、雷に居り、新居に園と、井宮家の碑

をえり、記を著し、家あり、(五月五日)

一 大坂毎日のホーム、ライフ、十回、誠金到来

一 古く、改訂、次あり、刊行、五月十日、葬儀十分

一 西条丹三、新室を、築あり、又、火、田、倉、

異状あり

一 五月廿二日遠近祭を大隈令館に打山中打歌
在りの、三宅菅原も花園進路後をみる

一 五月廿五日板上山尾の杉原病院の環式
防必角形二枚形、式法と設形を詳記

一 書物尾尾の需を考へ、備成雜記を考へ

一 早大出政部より余の著述の印紙を付回を
領収 五月廿五日

一 雜記「民族精神」日本の女性を語り「三書」を
定する、五月廿八日

一 數面十五枚條幅又紙釋一毫

一 六月廿日由子出床五日、六月七日日又
夏後湯一年

一 六月十日大隈後生徒る年祭昇又の時
今創是三十七代中記念八分をいし

一 廣地十九郎五去

一 六月十一日十二日十畝舎の人と大塚の遊
心を為す 十一日鉦子十二日香取鹿嶋
を始末を切る

一 以次歩成り女子園文選 余の隠筆二篇
を採録す之はめり四文一十一文を採む

一 余の撰書に傳り新井即治の碑 跋之り
六月十九日除幕布式を折ふ

一 余の隠筆二篇を採録す以次歩成りの中寄

田代清本(可判本) 卷四 撰刊

一 五十分の米穀収獲率上代八十五山 収獲率六

月十(書)

一 余が政治部商の關係時代の田代清本と聞かんとも
纂政史編纂委員大尾作州とて廿数ヶ條
の所見問書項を掲げ其の差あるを徹(未白)
二十一日速記に附了る也 二時右法に於て是より
廿八日次回の議を約す

一 大日本印刷社南年八分 余名義分六分

夏又差込分る回すはる欲ぬ 六月廿。

一 徴収分を長と増の長より残り余を長と長に推して
せんじりうもし廿四日分の引込分をひくと

一 早大出版部本期にあり十七日出版

一 住友銀行より余の預金残額三千二百円也と
報り来る、本年二月廿四日預け入の残金と
す(六月廿三日)

一 六月廿九日白山公園に於て長井雲塚

紀念碑の除幕とせ、祭典を奉ぐ、碑
字の余の押書も亦す。

● 七月一日早大の有志者相馬齋邸とて
ふと夏遠園を祝、此を以て振舞也

● 長井一の追憶文を著せし北物抄段の
山崎東天に授す、長井紀念館の落成
也 七月甲

一 早大出版部より中元御儀に三つ白山来 七月

一 今次の如柄板神殊、甚しく神戸市城郭の中心たり
溪の家尾全市戸敷の七割に達す城道皆不道六甲
山麓に在る道の字家別在まゝに徳減す

一 六西行八為八十五才を死す葬式也

一 七月七日日支事變滿一周年記念日多路海軍
に優祝を賜ふ

一 下林久雄死す^{七月八日}十一月葬儀

一 林若相(長妻)死去 妙山春子歿

一 其於村出りの遺物来る七月十日

一 七月廿三日夜行出が廿四日朝に歸る
着校友人と詣て一行四日徳長合意
外一人死行別所村に金山多内を請
心松崎新井御川の建碑を乞ふ翌日
二家祖徳長家手澤の遺化開帳十冊
を贈る
一 上野美永死去

一 皇軍九江を占領す 七月廿六日

一 新井時善の死の事 田文虎の江采樓上巻
巻三余名を物心共榮海を命し一冊
歌七押書しとす

一 川合直次死去 八月甲

一 内子名の徐臥床の事 八月七日漸やく立ち歩
くくやうなき

一 方助の叔本嘉次郎の病馬の内報

一 未了の八月七日 十三日朝死す

一 年次海評死去 八月廿日 享年七十有

有賀子文死去

一 郷令と押書をもつた二三日没頭十数紙成る

一 一葉の會史の白紙と修し一冊申す

秋の客す 行料別表
十二日別表

一 九月一日の二万十の大風 鶴家園の破山大
増長記念 十廿年内年

一 日本美術社の雑誌好丸：一稿を投ず九月の
一 亀田勝太郎の胸中秘「雑誌好丸」に
投ず 九月十日

一 出羽部の社会雑誌に大隈侯千秋萬歳
の稿を投ず

一 日本雑誌(二葉)通信に「酒礼」
稿の二稿を投ず 九月十日

一 元田原集 九月十日 十月一日 五代龍作死
十月七日

一 家蔵の書道法帖本を友人に贈りし事

二三日取酒に没頭す 十月一日

一 書道法帖乃三軒村山秋浦：と文部を托す

一 法帖類珠臨写：と文部 價石三十圓

一 文行を以て「雑誌」新書と文部す「書画複製」
本多教(包合) 北條の價 三百七十圓

一 大隈侯の御家書と名し早稲の六巻を託す

一稿を寄る 十月十日 湖公十年の回顧

一濱田海防の功績と十年の感懐とを以て彼の
雑誌に投ずる 十月十日

一村山新編に托して書意ある十三と一六千六百
四とを復し来る

一政界世来ル「ス」の歴史を考ふる

一雑誌の古「ル」時節の流の送むの歴史
と投ずる 十月十日

一廣東漢口攻略 十月四日下流

一十一月の旬放送を請はる断（元）

一東部の各報大隈長生延る事比を考

一稿を寄る

一十月書の出版部を以て一時金船を船めはる
借入とあるの預金証を換係に預け入る

一十一月の月刊誌を寄る板録の修理
に及ぶ

一 軍人後援分長としての大隈元一は前年
稿四ノ二の額に二万あり、十一月二日。

一 早稲の温文會として支那事變物外回座
債券(十四卷)一枚贈りしもの、十一月二日。

一 加賀達を以てして洗心亭法堂と號
せしむる此の點は余の筆意也

一 入道達を以てして十月八日
一村山に托して書畫を以て代金の四十分

田新に十一月九日其後才二次入金八万故也

一 出資部八万の進呈、十一月十日
一金三千圓才一紙の爲に預けし十一月十日

一 余の稿論と載せしもの、
來

一 板垣全社改定本の爲に十一月十日の此代料
也

一 不意に生じた故に今こぼれ甚しく因むる意
骨量も今もその意

一 高田侯士一月以來高田所貯る前銀高と
 別に入流の金に此の危馬日論の十割
 一 高田の金銀貯蓄二百万圓金銀高の計并銀金
 貯蓄と高田印の計より由金銀高日本銀行に三三万
 代金五万七千七百五十圓金銀高の計高田代金未以
 入千五百圓とす十一月末也

一 高田侯士十二月三日二十時三十分
 一 五日午時高田侯士遊館と大隈分館に移し大學
 系と行不望の陸軍の墓所へ合祭

一 早稲田大蔵のり子に高田の禱告一又と授す
 根柢本早稲田の報知のり子

一 出陣計りて高田金三万圓計り
 一 巡幸敗後現仰一高田又高田泰成に下す

一 高田七千圓の定期金高田銀行に預けり

一 高田口にもれし金銀高田府と高田の計銀金
 九万三千圓計りて高田の報知と其の
 田銀行に預けし金銀と高田の計銀金
 七千五百圓計り十二月十日

一 稿を詔り一編は済む所とあり
十二月十一日

一 出版部雜誌に二稿を投じ

一 追叙の雲を言介の枚餅政修費用并附帯より

追叙三言八十一回九十六割也大工神出言大り

二海内より十二月十二日

一 岩燈は年節の燈と云し一稿を投じ

一 大日本新聞会社本季即ち年八分、余名

義徳五〇、此所中六万七千四百十九割也由

小四十八回也

一 金を切代金六万三千四百五十九割半とあり

支店に定期預金として預け入り十二月十日

一 不用洋装雑誌を蔵部尾田の二巻切を託

十二月十日の支店あり

一 出版部本誌の南万十七日あり

一 村山と雲印を托し言責残り出意の内六點

考へん二万十月とあり

一 武蔵時報の支店八十四日 十二月十日

方田分書 丁丑遺物 杉葉下扇面春
欽 殿 堂 學 用 杖 刺 來 丁 二 月 廿 九

